

* ICU に入学を希望する受験生の学習のために公開している資料です。
ICU 公式の試験問題用紙ではありません。
(This is NOT the official Exam.)

No.000001

受験番号					
------	--	--	--	--	--

学習能力考査
社 会 科 学

資料及び問題
指示

係りの指示があるまでは絶対に中を開けないこと

0. 実際の試験は Microsoft Word(Mac 版?)で作っているみたい。
1. この考査は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができたかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に 40 の問い(1-40)があります。
3. 考査時間は、「考査はじめ」の合図があってから正味 70 分です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて 70 分をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります。答えが指示どおりでないと、たとえそれが正解であっても無効になりますから、解答の仕方をよく理解してから始めてください。
5. 答えはすべて、この冊子といっしょに配られる解答用カードの定められたところに、指示どおりに鉛筆を用いて書きいれてください。一度書いた答えを訂正するには、消しゴムできれいに消してから、あらためて正しい答えを書いてください。
6. もしなにか書く必要があるときは、必ずこの冊子の余白を用い、解答用カードには絶対に書き入れないでください。この冊子以外の紙の使用は許されません。
7. 「考査やめ」の合図があつたらただちにやめて、この冊子と解答用カードとを係りが集め終わるまで待ってください。集める前に退場したり用紙をもちだすことは、絶対に許されません。
8. 指示について質問があるときは、係りに聞いてください。ただし資料と問題の内容に関する質問はいっさい受けません。

「受験番号」を解答用カードの定められたところに忘れずに書き入れること

(一)

人はなぜ社会科学を学ぶのだろうか。また社会科学とはいかなる学問で、その醍醐味はどこにあるのだろうか。

いまこの考査に臨んでいる受験生諸君も、同じような疑問を抱きながら問題に向かっているかも知れない。じじつ毎年開かれる本学のオープンキャンパスでは、「社会科学とは何を勉強するのですか」という質問が多く寄せられる。もしあなたが辞書を引いてみれば、「社会科学とは社会の様々な現象を研究する学問の総称である」などと記されているのがわかる。だがこうした説明で納得できる人は少ないのではないだろうか。

実のところ社会科学という学問に対するイメージの曖昧さは、すでに入学を果たした新入生たちにも多かれ少なかれ共有されている。キャンパス内に社会科学系のサークルが乱立していた時代は遠い昔のこと、いまでは学生同士の会話の中から「社会科学の古典」に関する話はほとんど聞かれない。むしろ一般教養科目の授業を履修すれば、法学、経済学など社会科学系の学問について講義を受ける。だがそこで語られるのは個別の学問分野であり、社会科学の全体像について必ずしも提示されるとは限らない。

「社会科学とは一体いかなる学問なのだろう」という新入生たちの問いに答えるために、ICUでは一年生を対象にあるコースを開講している。この授業は定員15名という少人数のクラスで、テキストとじっくり向かいあいながら社会科学を学ぶうえで必要なスキルを習得し、学問の面白さを体験することを目標としている。英語のクラスに多大のエネルギーを注ぐICUの一年生にとって、共同研究やプレゼンテーション、レポート提出など多くの課題が求められるこの授業を履修することは容易ではない。だが毎年数十名の志ある学生たちがこのコースを選択し、担当教員と熱い議論を闘わせている。

この授業がテキストとして取りあげたのは、アメリカの歴史学者ジョン・ダワーが第二次大戦直後の日本を描いた『敗北を抱きしめて』（原題は*Embracing Defeat*, New York, 1999）であった。この書物はアメリカでピューリッツァー賞を受賞し、日本でも話題をさらった。またこの本のテーマは平和と民主主義であったが、それは日本の敗戦後まもない1949年に創立されたICUの建学理念と深くかかわる内容であった。このコースを選んだ教員と学生たちは、いまこそ戦後日本の出発点となったこの時代を知ること、ICUで学ぶ意味について考えたいと思ったのである。

さてクラスが始まると、受講生は先ずこの本の分量の多さ（日本語版では上下二冊、800ページ強）に驚く。毎週の授業では数章分の内容を要約し、簡単なリサーチを含めて時間内に報告することが求められる。テキストの講読が一通り終わり、息抜きのフィールドトリップをしたのも束の間、今度はコースの最終日に設定された合同セミナーに向けて、数名ずつのグループに分かれて共同研究を進めなければならない。

この合同セミナーに向けて学生たちが設定したテーマは、自衛隊の海外派遣や憲法改正、靖国参拝や教科書問題、愛国主義教育の進展など、近年ニュースで話題となったトピックが多く

取りあげられた。各グループは授業後に図書館などに集まり、プレゼンテーションの準備に取りかかったが、実は一番の難関がここから始まった。どのように議論を組み立てるべきかについて、メンバーの意見がまとまらなかったのである。

例えばあるグループでは憲法第九条を変えるべきかについて、グループ内の意見が真っ二つに割れた。「戦争放棄という理想を活かす」という点で一致したグループでも、その具体的方法について一人ひとりの考えは違っていた。同じことは自衛隊の海外派遣をテーマに選んだグループにも当てはまり、海外派遣の是非だけでなく、自衛隊の存在を合憲と見るべきか否かについても意見は一致しなかった。それぞれが自分の意見を真剣に主張すればするほど、議論はかえって平行線をたどった。中には各自の言い分を整理して一冊の脚本にまとめ、深夜の討論番組そっくりに仕立てて報告を行ったグループもあった。

合同セミナーの日が迫り、困った学生たちは担当教員の研究室を訪ねた。すると教員のアドバイスは彼らには意外なものだった。「一歩引いて考えてみようか。」そして憲法第九条や自衛隊の海外派遣については、長いタイムスパンの中で他国の事例と比較しながら考えることを勧めた。また政府の言論統制と世論の関係について取りあげたグループには、「ダワーは戦後のGHQによる言論統制が、戦時中のそれに劣らないくらい厳しいものだったと言っているが、実際はどうだったのだろうか。一度図書館で当時の新聞を調べてみたらどうだい」と誘った。さらにあるグループは『敗北を抱きしめて』に登場する一人の人物（例えば尾崎秀実^{はつみ}）の生涯について、徹底的に調べてみるようにアドバイスされた。

このようなやりとりを経て、合同セミナー当日に行われたプレゼンテーションの内容は、報告した本人たちが驚くほどに変化していた。憲法第九条の再評価をめざしたあるグループは、戦後政治史の中でその解釈がどのように変遷してきたかを踏まえ、PKO協力法（1992年）に基づいて実施された自衛隊のカンボジア派遣について詳細な分析を行った。また自衛隊と旧西ドイツの再軍備の違いについて検討したり、天皇制の特質を明らかにするためにイギリス王室と日本の皇室の法的な位置づけを比較したグループもあった。

それらの報告は決して自分の「正しさ」を主張するものではなかったが、聴衆にとっては強い説得力をもつ内容だった。また彼らが調査によって知った興味深いエピソードや、作業の実感にもとづいた見解などがいくつか紹介された。

例えばあるグループは、1932年の上海事変でマスコミが「肉弾三勇士」の物語を宣伝した時、反戦詩人として有名な与謝野晶子の夫だった与謝野寛（鉄幹^{てつせき}）が彼らを頌える歌を作っていた事実を紹介した。また戦前の新聞は現在と同じくらい多くの広告が紙面に見られたのに、戦局の悪化と共に新聞もタブロイド判となって広告のスペースが減ったこと、それは物資不足に悩んだ戦後の占領時代でも変わらず、戦中と占領期の連続性を強調するダワーの視点はこの部分からも証明できること、などである。

さて合同セミナーの報告が終わると、担当教員は次のように学生たちに語りかけた。「みんなが今日行ったプレゼンテーションは、決して誰かを言い負かすためのものではなかった。でもそれぞれの発表で報告された多くの事実はみな、たとえ意見の違う人でも納得できる内容だ

った。社会科学を学ぶことの大切さはまさにここにある。民族や宗教、国家間の紛争など、容易に解きほぐせない対立が続いている現代の世界だからこそ、自分を冷静にふり返り、他者を理解しようとする努力が必要だ。社会科学は私たちに異文化と対話する術を教えてくれる学問なんだよ」と。

たしかに初めのうち、学生たちの発言には「これを主張したい」という思い入ればかりが目立った。だがプレゼンテーションの準備が進むにつれて彼らは肩の力が抜け、異なる意見をもつメンバーの話に耳を傾けながら、一致点を探そうと努力するようになった。その実、彼らは自分が無意識に前提としている価値観からいったん自由になって、互いの意見が論理的な整合性をもっているかに注意しながら、検証を積み重ねる作業を行っていたのである。

さらに学生たちはこうした地道な作業の中から生まれた結論こそ、意見や立場の違いをのり越えた普遍性をもっていることを知った。彼らは社会科学にとってまず重要なのは、他者と結論を共有できるような検証作業にあることを発見したのである。

(二)

このように「社会科学とは何か」について議論をすると、しばしば次のような意見に出くわすことがある。「科学というからには、データの分析に基づいた議論であるべきだ」と。この問題を読んでいる受験生の中にも、社会科学に対して同じイメージをもっている諸君がいるかも知れない。すなわち数字の示す威力は圧倒的で、データが示す結果は反論を許さない。誰の目にも明らかな根拠を提示出来てこそ、初めて社会科学の名にふさわしいという考え方である。

たしかに客観的な根拠を示すことは、社会科学の思考において不可欠な要素である。また数字を活用した分析も、社会科学のある分野が得意とするところだ。だがここで注意すべきは、一見非の打ちどころのない議論がともすれば脆さを抱えているという事実である。

ふつう人々が社会科学の手法に対してもっているイメージとして、「理論的できっちりしている」というものがある。このイメージは演繹法えんぎくほうという分析方法と密接な関係にある。演繹法とはまず明確な理論を持ち、仮説を立てたうえで検討を進めるやり方で、解決すべき問題を限定しながらも、はっきりとした結論を提示することを特徴としている。社会科学の中では政治学や法学、経済学、社会学などがこうした分析スタイルを多く採用しており、いかなる理論に依拠し、どこまでを分析の対象とするのかについて、あらかじめ厳密に規定することを重んじている。

いっぽう社会科学にはもう一つの分析スタイルとして、帰納法きゆうなつほうと呼ばれる方法がある。これは演繹法とは対照的に、あらかじめ分析対象や理論を明確にしたり、仮説を提起するという作業をあまり行わない。むしろ帰納法は実験や観察によって得られた知見をもとに、法則性や結論を導き出す分析方法であり、社会科学では人類学や歴史学がこうした手法を取っている。この二つの分析手法は車の両輪のようなもので、それぞれが社会科学の進展に深く寄与しているといつてよいだろう。

だが社会科学の現場では、時として二つの分析スタイルが不協和音を奏でることがある。例えば演繹的な社会科学にとって、一番大切な作法とは「最初に決めたルールに則^{のっと}る」ことである。法学者の交わす議論が「その主張は合法的であるかどうか」を焦点に展開されるのはそのよい例といえるだろう。だが帰納的な社会科学から見ると、演繹的な社会科学は理論的な枠組みを重んじる余り、分析の内容が必ずしも実態に即していないように映る。演繹法がある一つの理論を採用した瞬間、そこからこぼれ落ちる多くの事例を無視していると感じるのである。ここで帰納的な社会科学が「こんな事実もあるのだが」と言いだそうものなら、演繹的な社会科学からルール違反であるという反発を食らうことになる。それは今回の分析で解明すべき問題の範囲外だ、初めにちゃんと約束を交わしたではないかというのである。

これら演繹法と帰納法という社会科学の二つの手法がかかえる齟齬^{そご}は、研究者が自分たちの学問分野を離れて、他分野の人々と共同作業を進めるときに明らかとなる。こうした複数の分野にまたがる研究を学際研究と呼び、その一つに1980年代に盛んとなった地域研究があった。これはアジア、アフリカや南北アメリカなどの各地域について、さまざま学問分野からの研究成果をもち寄ることで、それぞれの社会の特質について立体的な理解をめざすものだった。

だが今日ふり返ってみると、この地域研究の結果は決して満足できるものではなかった。それぞれの学問分野で分析の手法や目標とするゴールが異なり、議論がかみ合わなかったのである。例えば開発経済学を専門とする学者にとって、一番の関心はある理論モデルがそれぞれの地域にどの程度当てはまるかにあった。これに対して人類学者はさまざまな文化現象の分析を通じて、社会ひいては人間集団の独自性がどこにあるかに関心をもっていた。両者は同じく「地域」という言葉を使いながらも、一方は普遍的な原則が適用できる空間的範囲を、他方が固有な論理をもった一つの文化領域を指していた。その結果として人類学者は経済学の「地域」に独自性が欠落しているという物足りなさを感じ、経済学者は人類学の「地域」にとりよめのない煩わしさを感じた。結果として学際研究としての地域研究は、かえって各学問分野がもつ分析方法の有効性に疑問符をつけてしまった。

さて社会科学の手法に見られる違いの中で、演繹法に対して最も慎重な姿勢を取るのが歴史学であるといつてよいだろう。歴史学は史料批判に基づく考証作業に秀でていたこともあって、ある理論を活用して分析を進めることに対して「ナイーブな青年」のように晩生^{まぐて}である。むしろ歴史学も、社会科学の一翼を担っている限り、理論化や法則性の発見に対して無関心ではない。それをよく示すのは、私たちが歴史の教科書で見慣れている「古代」「中世」「近代」などといった時代区分である。

これらの時代区分は、世界の歴史はある共通の発展法則をもっているという歴史理論を前提としている。またそれぞれの時代は奴隷制や封建制といった制度（これを生産様式などと呼ぶ）と結びついており、社会の発展に伴ってそれらの制度も変化すると考えられた。そして20世紀後半の歴史学界は、世界各地の歴史をどのように時代区分するかについて研究と議論を積み重ねた。世界史、日本史教科書の章立ては、こうした時代区分に関する成果を踏まえて作られている。

だが一見整然と見える時代区分の理論も、実際には多くの問題点を抱えていた。この歴史理論はヨーロッパ史をモデルとして作られたものであったため、それをそのまま他地域の歴史に当てはめても、解釈のつかない事象が多い。インドのカースト制度を歴史的にどう位置づけるのか？ 中国で大きな社会変化が発生した宋代とはいかなる時代と評価できるのか？ 一時は理論通りに展開しないアジア史を解明するための手がかりとして、「アジア的生産様式」という概念が提起されたこともあった。だが結局それはアジアが発展の法則から落ちこぼれた停滞的な社会であると決めつけた議論であり、それぞれの社会がもつ固有な歴史的特質を把握出来ていないという批判が生まれた。

また時代区分を支える歴史理論は、その出発点となった^{はび}のヨーロッパ史においても自明のものではない。その一つの例が「中世の終わりはいつか」についての論争である。もともと「中世 (Middle Ages)」という言葉は、古典古代と近代という二つの「文明の時代」には含まれた中間の時代を意味しており、はじめに近代ありきの理論先行型の概念だった。その内容についても、中世の始まりを西ローマ帝国の滅亡とする点ではほぼ一致したものの、中世と近代の境界線をどこで引くかについて歴史学者の意見は分かれた。教科書の中でヨーロッパ近代の始まりについて、ルネサンスや宗教改革など複数の異なる説明がなされているのはその結果である。しかもルネサンスという概念は19世紀になって「発見」されたものであり、当時生きていた人々によって意識されていたものではない。実は世界史の理論を支えるヨーロッパ史の時代区分そのものが、ある種の危うさをはらんだ概念なのである。

さらに時代区分論が生み出した問題点は、一つの分析枠組みによって巨大な理論体系を構築した結果、ともすれば硬直した歴史像を生んでしまったという事実である。すべての歴史事象は社会の発展に寄与したかどうかで価値を値踏みされ、先進的な地域や事例に歴史学者の関心が集まった。その結果海域を含む辺境の歴史やマイノリティーの問題など、歴史が本来抱えている多様な側面は切り捨てられたのである。

いま多くの歴史学者はこれら通史の大系すなわち大文字のHistoryを何とか乗り越えようと試みている。いわゆる「通説への挑戦」である。ある者は人類学や経済学など隣接する諸科学から最新の成果を取り入れることで、新たな理論的枠組みを構築しようとした。またある者はポストモダンの新思潮を学びながら、「歴史と記憶」といった新しい研究分野を開拓しようとした。だがこうした努力を通じて明らかになった事実は、一つの理論によって歴史を切りさばくことなく、矛盾に満ちた現実に踏みとどまることの重要性だった。「千里の道も一歩から」というが、まず色眼鏡を捨てて歴史の現実に向きあわない限り、本当の意味で説得力をもつ理論も構築出来なければ、新しい発見も生まれないのである。

一つの例をあげよう。現在の日本がかかえる外交問題の中で、最も暗礁に乗りあげているのが日中関係である。少なくとも両国の教科書に記された通史を読むかぎり、日中関係の歴史は矛盾と対立に満ちており、戦争以外の道が可能であったようには思えない。

だが実際には日本の大正デモクラシーを代表する政治学者である^{よしのさくぞう}吉野作造は、中国における新文化運動の旗手であり、中国共産党の創設者の一人となる^{りたいたしやう}李大釗と友好関係をもっていた。

吉野作造は第一次大戦後のアジアで起きた民族自決の動きに理解を示し、朝鮮で発生した三・一独立運動では日本政府の強圧策を批判した。また同じ年に発生した五・四運動の時に、吉野は日本の警察に逮捕された中国人留学生の救出に奔走し、講演料などのかなりの部分をアジア留学生の生活支援に当てていた。こうした吉野の努力を知った李大釗らは、当時中国で進められていた新文化運動のモデルとして、吉野の指導下に成立した学生の思想運動団体である新人会などに強い関心を寄せた。その結果1920年に北京大学の学生代表団が東京を訪問し、日本の学生とのあいだに交流が実現したのである。

この時代の大勢からすれば、吉野作造のケースは例外といってよいだろう。当時日本人の多くは、中国を日本が助けてやらなければ何も出来ない「東洋の病人」と見下しており、五・四運動における日本製品のボイコットに戸惑いながらも、その意味するところを理解出来なかったからである。だがいかに希有な例であろうとも、こうした史実が存在したことは私たちに勇気づけてくれる。それは両国間の関係がこじれ、人々の無理解と敵意が増幅されている今こそ、顔と顔とをつきあわせた地道な交流が必要であることを教えてくれているからである。

社会科学における演繹法、帰納法という二つの手法は、時に齟齬をはらみながらも互いに補いあう関係にある。もちろん社会科学はいつもすっきりとした結論を提示するとは限らない。また全体を鳥瞰するような体系が必ず手に入るわけでもない。むしろ理論や通説からこぼれ落ちてしまう事実を直視し、時に矛盾した厳しい現実と踏みとどまる忍耐力こそが、問題解決の糸口につながる深い理解を可能にするのだといえよう。

(三)

ここで私たちはもう少し「現実に踏みとどまること」について考えてみよう。先ほどの議論では社会科学における理論化の誘惑が、ともすれば巨大な通説の体系を作り出してしまいう危険があることを指摘した。また時代区分の理論が歴史を一色に塗りつぶしたことへの反省から、歴史学は演繹的な手法に対して警戒心をもっており、それが帰納的な社会科学の可能性を開くものであることを紹介した。だが実のところ演繹的な社会科学に対して示された反応は一つではない。その中でいま波紋を投げかけているのは、もはや演繹的な理論が当てにならない以上、自分の信ずるままに歴史を語り、つくり出そうとする主観的な歴史認識が台頭し始めたという事実である。

この主観的な歴史認識という問題は、歴史学と歴史文学の違いについて考えてみるとわかりやすい。一般に歴史文学はフィクションであり、歴史の事実をそのまま反映していないと考えられている。歴史学者の色川大吉は司馬遼太郎の歴史小説を例に取りあげ、歴史文学の目的は「精神的な楽しみ」を与えることにあり、明治維新などで活躍した英雄たちを好んで描くが、社会の底辺にいた人々の姿は目に入っていないと批判した。小説家の想像力による脚色や演出が許される歴史小説と異なり、歴史学では確かな証拠に基づく客観的な「事実」だけを話さなければならないというのである。

これに対して文学者の側から、歴史学と歴史文学の違いが形成されたのは19世紀以後に過ぎず、それ以前の歴史は語り手の考えと不可分の関係にあったという指摘がなされた。また歴史の事実とは「歴史家によって創造される」ものであること、すなわち歴史は出来事をありのままに描いたものではなく、歴史学者が自分なりの言葉づかいやロジックを用いて叙述することにより、初めて成立しているという意見が出た。歴史学者も一つの時代に生きる人間であり、その認識はすべて時代の制約を受けている。自分たちが生きている近代的な価値観を前提とせず、それを批判的に自覚しなければ、異文化としての過去に生きた人々の生活は理解出来ないという主張が生まれた。

この「歴史の語り」に関する問題の深刻さが認識されるようになった一つのきっかけは、第二次大戦中のナチス・ドイツが行ったユダヤ人の大量虐殺について、その事実性や評価のあり方について異論が出た時のことだった。1980年代に一部の学者たちが、強制収容所にガス室が存在し、これを用いてユダヤ人の絶滅作戦が行われたというのは全くのウソであり、これを事実であるかのように語ってきた従来の歴史は修正されなければならないと主張した。またガス室の存在までは否定しなくとも、ナチスのユダヤ人虐殺は歴史上のさまざまな体制下で行われた殺戮行為と本質的に同じであり、これを「比類なき悪の遺産」として特別視するのは誤りだと主張する歴史学者も現れた。

歴史修正主義などと呼ばれるこれらの考えは、二度の大戦に対する反省から出発した戦後歴史学の成果に対する最大の批判であり、20世紀後半の世界が共有していたタブーに対する挑戦でもあった。だが歴史学者にとって最もショックだったのは、誰の目にも明らかであるように思えたナチスの犯罪行為が、殺された人々について何の手がかりも残さないような一種の「完全犯罪」であったために、実際のところ何が行われていたのか解明できないということだった。

さらに歴史修正主義者の意見に同調しない人々の間からも、歴史が歴史学者によって創造されるものである以上、歴史の解釈には違いが生じるのであり、一つの解釈が他の解釈よりも真実であることを決定できるような「客観的」基準は存在しないのではないかという批評がなされた。それまで「歴史を科学的に研究すれば、結論は必然的に一つになる」などと素朴に考えていた歴史学者にとって、いわゆる歴史理論（とくに歴史発展の理論）が歴史理解の一つでしかなく、いかに相対的なものであったかを思い知らされたのである。

こうした事実直面した歴史学者は、改めて歴史の現実に踏みとどまることの大切さを認識するようになった。人間の価値観が多様であるからといって、それぞれが従来の研究成果を無視して勝手に歴史を解釈したのでは、ひとりよがりな歴史像しか生まれない。一方で少数意見が時として真実をついているケースがあるように、残された証拠が少ないことはその事件が存在しなかったことを意味しない。むしろ耐え難い恐怖を味わった人間がその記憶を忘れようとするように、過酷な歴史を経験した社会がその事実について口を閉ざしてしまう可能性は充分にある。歴史学者は重い歴史の現実を前に、沈黙してしまった人々の「声なき声」に耳を傾けることが重要であると考えたのである。

ふつう歴史学者はこの現実とねばり強く対話する作業を史料の発掘という形で行う。彼らが

用いる史料のジャンルはさまざまであり、公文書から個人の日記や書簡、文学作品やポスターなど多岐に及ぶ。また最近では高齢となった第二次世界大戦の体験者に対する聞き取りも、その内容をいかに検証するかについて試行錯誤を伴いながら行われるようになった。むろん人間の認識に限界があるように、一つの史料によって語られる事実には限りがある。だが異なるジャンルの史料と向かいあい、それらを有機的に組み合わせることによって、長く批判に耐える幅広い歴史認識が生まれると考えられた。

さらに歴史の現実に踏みとどまろうとする歴史学者の努力は、個別の事実認識を積み重ねることによって得られる社会観ひいては人間観構築の過程でもあった。ここではその一例として、ジャーナリストとして活躍したある日本人牧師の例を検討しよう。彼の名前は清水安三^{しみずやすぞう}といい、北京のスラム街に崇貞学園^{すうてい}と呼ばれる学校^{しょうかいせき}を創設したことで知られる。彼は1927年3月に北伐途上だった国民革命軍総司令の蒋介石を訪ねたが、その印象についておよそ次のように記している。

蒋介石はカーキ色の中山服^{ちゅうざん}（つめ襟の上着の一種）を着て、いかにも軍人らしく見えた……。人品は決して卑しくない。カルチャーのある顔をしている。左右両派の争いを苦に病んで神経を尖らせていると思いきや、なかなかどうして余裕もあれば元気もある……。

蒋介石の印象は極めてよかった。蒋介石は殆んど全部自分で処理決定を行って、朝の五時、六時から夜中の一時、二時まで執務するそうである。人に委ねざるところはナポレオンを学んでいるらしい。

ありていに言えば、私は蒋介石などにあまり会いたいと思っていなかった。彼のごときは私の眼中にないのである。と言うとなんだか偉そうなことを言っているようだが、私は威張ってかく言うのではなく、別に考えるところがあってかく言うのである。

大体中国にあっても、近代においては一人、二人の英雄豪傑がいたところで、何ほどのことも出来ないことを知っている。英傑を中心にして考えることは、中国にあってももう古いのである。故にむしろ私は蒋介石のリードする中国の群衆なるものが、どのくらいまで真摯に、真剣に躍動しているかを知らうと欲する。いま国民革命軍が成功できるかどうかは、中国の群衆が国民革命を理解し覚醒したかどうか、その程度いかににかかっている。

ゆえに私は蒋介石のごときに会見するよりも、むしろ国民革命軍に参加している学生隊の一兵卒、もしくは黄埔軍官学校出身の少尉により関心を持つ。その方がよほど面白くもあり参考にもなる。とはいえ国民革命軍を今日のごとく成功させるためには、蒋介石その人の功績も大きいと見てさしつかえない。私は彼がどれくらいまで近代中国の民衆に触れているか、現代中国の要求をどれくらいまで自覚しているかを知らうと欲して、わざわざ彼を訪ねたのであった。

一人のジャーナリストとして見た時、清水安三の最大の特徴は四・一二クーデターの直前という歴史の転換期に、事件の核心人物となる蒋介石を訪ねた嗅覚の鋭さにある。むろん彼は社

会科学の専門家ではなく、この文章も歴史は「群衆」すなわち民衆が創るものであり、一部の「英雄豪傑」の独占物ではないという、それ自体は平凡な認識を表明しているに過ぎない。だがこの清水の中国観が面白いのは、彼がねばり強く中国とかかわり、その動向を見すえようとした末に生まれた認識だという点にある。

もともと清水安三は同志社大学の四年生だった1915年に、日本の青島占領に刺激を受けて中国伝道をめざした神学生であった。だが牧師の職を辞してまで中国人社会との関わりを求めた彼は、1919年に北京で五・四運動に遭遇した。この時彼が目にしたものは日本製品の焼却大会が行われる中で、当時は貴重品だった自転車を泣きながら火に投げこんだ中学生の姿であった。清水は二十一ヶ条の要求に見られる日本のやり方が、いかに中国人の怒りを買ったのかを知り、「刺すようなショックを受けた」と記している。

蒋介石の訪問記で見た清水の中国民衆に対するこだわりは、こうした体験をもとにして生まれた視点であった。それはアジア人学生による民族自決の要求にデモクラシーの本質を見出した吉野作造の認識に比べれば荒削りであったが、当時の日本社会にあっては抜きん出た深みをもつ中国理解であった。さらに重要なのは、清水はこれらの見解を何かの理論に頼ることなく、自らの観察と思索の中から育てたという事実である。

さきに紹介したジョン・ダワーの『敗北を抱きしめて』もまた、一人のアメリカ人が敗戦直後の日本社会という異文化を理解しようとねばり強く対話を試み、格闘した書物であった。ダワーは日本語版への序文の中で、アメリカでは日本を特殊で画一的な社会とみなすステレオタイプな見方があるが、彼は「日本たち (Japans)」すなわち世界の全ての社会がそうであるように、多様で複雑な社会として日本を理解しようと試みたと述べている。そしてダワーは史料に残された日本人の「声」に耳をかたむけた結果、敗戦という苦難のただ中であつた多くの日本人がアメリカ人と同じく「平和と民主主義」という理想を真剣に追求していたという事実を発見し、深く心を打たれたという。

このように演繹的な理論を多用するように見える社会科学も、その最先端の現場では粘土をこねあげるようにドロ臭い地道な作業が続いている。仮説は提起するが、ディテールにこだわり、たゆみない検証作業のなかで確実な結果だけを取り出す。その繰り返しかえしの中から、本当に普遍性をもった理論の構築をめざす。あたかも錬金術師の魔法のようだが、人間はこうした厳しい研究姿勢によってこそ自らを時代の制約から解放し、人々に勇気を与えるような「発見」を生み出すことが出来る。ねばり強く現実にこだわること、その作業を通じて他者を理解するための暖かなまなざしを鍛えることに、社会科学を学ぶ醍醐味があるのだといえよう。

【参考文献】

ジョン・ダワー（著）、三浦陽一・高杉忠明・田代泰子（訳）『敗北を抱きしめて』、上・下、岩波書店、2000年（増補版、2004年）。

成田龍一『歴史学のスタイル—史学史とその周辺』、校倉書房、2001年。

松尾尊兌『民本主義と帝国主義』、みすず書房、1998年。

S.フリードランダー（編）、上村忠男・小沢弘明・岩崎稔（訳）『アウシュヴィッツと表象の限界』、未来社、1994年。

高橋哲哉『記憶のエチカ：戦争・哲学・アウシュヴィッツ』、岩波書店、1995年。

上村忠男『歴史的理性の批判のために』、岩波書店、2002年。

清水安三『支那人の魂を掴む』創造社、1943年（なおこの文献の引用にあたっては、現代かなづかいと異なる文字など一部の表現を改めている）。

次の問題（1－40）には、それぞれ a, b, c, d の答えが与えてあります。各問題につき、a, b, c, d のなかから、最も適切と思う答えを一つだけ選び、解答用カードの相当欄にあたる a, b, c, d のいずれかのわくのなかを黒くぬって、あなたの答えを示しなさい。

例 a b c d

1. この文章の表題として最も適切なものを次の中から一つ選べ。
 - a. 社会科学の歴史
 - b. 現実と向きあう社会科学
 - c. 社会科学における主観と客観
 - d. 社会科学の危機

2. 「社会科学の古典」といわれるテキストのうち、著者と作品の組み合わせが間違っているものは次のうちどれか。一つ選べ。
 - a. デュルケム『国富論』
 - b. フーコー『監獄の誕生』
 - c. ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』
 - d. マルクス『資本論』

3. 現行の政府の政策が「合憲」であるかを判断するしくみと最も関わりが深いのは、次のうちどれか。一つ選べ。
 - a. フランス「人権宣言」
 - b. アメリカ合衆国憲法
 - c. マグナ・カルタ
 - d. ヴェルサイユ条約

4. 自衛隊が派遣されたカンボジアは、長い植民地と内戦の歴史をもつことで知られる。このカンボジアの歴史の説明として、間違っているものを一つ選べ。
 - a. カンボジアを保護国としたフランスは、この地をインドシナ連邦に組み入れた。
 - b. ヴェトナムがカンボジアに侵攻すると、中越戦争が勃発した。
 - c. 国連カンボジア暫定行政機構（UNTAC）は、ボル＝ポト派を含む全ての政治勢力の参加を得て総選挙を実施した。
 - d. ロン＝ノル将軍がクーデターを決行すると、アメリカ軍と南ヴェトナム軍がカンボジアに侵攻した。

5. 「肉弾」は、作家桜井忠温^{さだひろ}が日露戦争での体験を書いた戦記のタイトルがその後人々に使われるようになった言葉だが、このように20世紀前半の戦争体制のなかで一般化した言葉ではないものを一つ選べ。
- 銃後
 - 攘夷
 - 転進
 - 少国民
6. 与謝野晶子の反戦詩として有名な「君死にたもうことなかれ」に関する説明として、正しいものを一つ選べ。
- この詩は太平洋戦争の時に、特攻隊員として死んだ弟をうたった作品である。
 - この詩は日中戦争の時に、南京で死んだ弟をうたった作品である。
 - この詩は日清戦争の時に、黄海の海戦で死んだ弟をうたった作品である。
 - この詩は日露戦争の時に、旅順の戦いに加わった弟をうたった作品である。
7. 本文の中で一年生が合同セミナーで行なったプレゼンテーションは、なぜ大きく内容が変化していたのか。以下の説明のうち、最も適切なものを一つ選べ。
- 担当教員を訪ねて具体的なアドバイスを受けたから。
 - くり返し集まって議論を重ね、高度なプレゼンテーションの方法をみ出したから。
 - 自分の考えを冷静にふり返り、論点の妥当性に留意しながら検証したから。
 - 自分の正しさを証明するために、相手を論破する根拠を数多く集めたから。
8. 戦争や対立的な国際関係など、簡単には合意の得られない問題について研究するときには、どのような態度が大切か。筆者の考えに最も近いものを一つ選べ。
- まず判断を保留し、できるだけ多様な事例に注意を向けることである。
 - 事実の賢い取舍選択によって、自分の考えの正しさを論理的に証明することである。
 - 首尾一貫した理論的枠組みに沿って問題をとらえることである。
 - 討論番組のように、対立する意見を自由に発言できる場所を提供することである。
9. 最も演繹的と考えられる判断は、次の例のうちどれか。一つ選べ。
- 山岳部族と共に生活することが、彼らの言葉を学ぶ早道であるとわかった。
 - 正八面体のサイコロを振ると、次に「1」が出る確率は8分の1であろう。
 - ジグソーパズルの完成図を無くしてしまったが、勘に頼ればなんとかなる。
 - 通りにカフェがたくさんある。どうやらこの国の人はよくコーヒーを飲むらしい。

10. 社会科学における演繹法と帰納法について、筆者の考えに最も近いものを一つ選べ。
- 帰納法では分析の範囲がはじめから明確でなくても構わない。
 - 演繹法は問題の結論を先決めしてしまう方法である。
 - 帰納法の弱点は、異分野間の交流が行われた時に明らかになる。
 - 演繹法は原理的であり、帰納法は応用的である。
11. 分野の異なる専門家たちが共通の主題について共同研究を行うことを、学際的研究とよぶ。この方法があまり適さないと考えられるのは次のうちどれか。一つ選べ。
- ジェンダー学
 - 平和研究
 - 音楽理論
 - 環境学
12. 地域研究の結果が満足できるものとならなかった理由として、本文の内容に当てはまらないものを一つ選べ。
- それぞれの専門分野で「地域」の意味する内容が異なっていたから。
 - それぞれの専門家が相手の専門分野を理解しようとしなかったから。
 - それぞれの専門分野がもつ分析方法の有効性に疑いが生じたから。
 - それぞれの学問分野が前提とする条件が異なり、議論がかみ合わなかったから。
13. 筆者が歴史学を「ナイーヴな青年」にたとえているのはなぜか。以下の説明のうち、最も適切なものを一つ選べ。
- あらゆる事象を説明できる普遍的な法則を固く信じているから。
 - 判断に慎重で、時間をかけて結論を下すから。
 - 他の分野と比べて比較的最近に生まれた、若い学問と言えるから。
 - 戦争や他国の侵略に一貫して反対してきたから。
14. 歴史学の時代区分論に関する説明として、本文の内容に最も合うものを一つ選べ。
- 時代区分論は世界の歴史がそれぞれ固有な発展をしてきたという前提に基づいている。
 - 時代区分論はヨーロッパ史ではきわめて満足すべき成果をあげたが、アジアの歴史にあてはめるとうまくいかなかった。
 - 時代区分論の問題点の一つは、歴史のくり返しを説明できないことだった。
 - 時代区分論は整然とした理論体系を打ち立てた代償として、歴史の複雑さを犠牲にした。

15. インドのカースト制度に関する説明として、最も適切なものを一つ選べ。
- カーストはもともと血統を区別する言葉であるが、さらに特定の職業と結びついた細かな社会集団に分けられていた。
 - カーストは日本の「士農工商」制がそうであったように世襲的な身分制度であるが、婚姻によって自分のカーストを変更できる。
 - カーストは宗教的な階層制度であり、神に対する貢献によってその都度本人のカーストが決定された。
 - カーストは大土地所有者であるクシャトリアが、自分たちの支配を安定させるために創設した階級制度であった。
16. 「発展の法則」から見たアジアについて、本文の主旨に最も合うものを一つ選べ。
- ヨーロッパをしのぐほどの経済発展を遂げているアジアを「落ちこぼれ」と見るのは間違いである。
 - 「アジア的生産様式」という概念を導入すれば、アジアの発展も法則的に説明することができる。
 - 何が「発展」であるかを、ヨーロッパを基準にして定義する以上、アジア史の時代区分を論じても不毛である。
 - アジアの停滞は、中世から近代への移行がスムーズに行われなかったことによる。
17. ヨーロッパ史における「近代の始まり」の一般的な説明において、最も関係のない事柄を一つ選べ。
- 共通言語としてのラテン語の普及
 - 活版印刷による情報の大衆化
 - 主権国家による軍事力の独占
 - 航海術の発達による商業圏の拡大
18. 歴史学の時代区分論にしばしば登場する封建制という言葉の説明として、適切でないものを一つ選べ。
- ヨーロッパの封建制度は貴族間の契約関係であり、主君も臣下に対する義務を負った。
 - 日本の封建制度は武家間の契約関係であったが、「いざ鎌倉」の物語に代表されるように、臣下の君主に対する忠誠が強調された。
 - 中国の封建制度は諸侯間の契約関係であり、諸侯の多くは君主と血縁関係にあった。
 - 封建的な土地所有制度では、直接生産者が支払う地代には物納、金納などいくつかの段階があった。

19. 「ルネサンス」という言葉に似たニュアンスを持たない言葉は次のうちどれか。一つ選べ。
- a. revival
 - b. resolution
 - c. renewal
 - d. restoration
20. 本文において「大文字のHistory」という言葉が意味しているものは、次のうちどれか。最も適切なものを一つ選べ。
- a. 自分に都合の悪い事実は認めようとしなない、ひとりよがりな歴史観。
 - b. 「古代」「中世」「近代」といった区分が不可能な、大きな流れとしての世界史。
 - c. 複数の解釈や説明の余地のない、単一の説明体系としての正統的な歴史。
 - d. 科学的な研究によって結論に到達するような歴史の研究手法。
21. 吉野作造と李大釗に関する説明として、最も適切なものを一つ選べ。
- a. 李大釗と共に中国共産党を創設した中心人物は周恩来であった。
 - b. 吉野作造は天皇制下の日本で可能なデモクラシーの形として民本主義を提唱した。
 - c. 文化大革命が始まると、李大釗は資本主義の道を歩む実権派として批判をあびた。
 - d. 吉野作造の提起した天皇機関説は、ファシズムの台頭と共に厳しい批判にさらされた。
22. 三・一独立運動と五・四運動に関する説明として、最も適切なものを一つ選べ。
- a. この二つの運動はアメリカ大統領のフランクリン・ルーズベルトが民族自決の原則を唱えたことへの反応だった。
 - b. 五・四運動時に上海では中国共産党の指導によって激しいストライキが展開された。
 - c. 三・一独立運動の後、金日成は上海で大韓民国臨時政府を樹立した。
 - d. 三・一独立運動が武力弾圧された当時の日本の首相は、平民宰相と呼ばれた原敬だった。
23. 筆者は五・四運動期における日中知識人の交流という事例から、社会科学の特質をどのように論じているか。当てはまらないものを一つ選べ。
- a. 社会科学はいつも全体を鳥瞰するような体系を提示するとは限らない。
 - b. 社会科学は通説からこぼれおちる事実を直視するような忍耐力が必要である。
 - c. 社会科学はいつもすっきりとした結論を提示できる訳ではない。
 - d. 社会科学はできるだけ多数意見が反映されるような結論を提示する。

24. 「現実に踏みとどまる」ことを怠った場合、どのような問題が生まれると筆者は考えるか。最も適切なものを一つ選べ。
- a. 先に想定した結論が自分の視野を狭め、それと矛盾するものを排除してしまう。
 - b. すっきりとした理論的な結論を導くことができなくなる。
 - c. デイテールにこだわるあまりに、世界規模の通史が見えなくなってしまう。
 - d. 仮想的空間に埋没し、現実と非現実の区別がつかなくなる。
25. 主観的な歴史認識の台頭および歴史学と歴史文学の違いという問題について、筆者の考えに最も合うものはどれか。一つ選べ。
- a. 主観的な歴史認識とは、演繹的な歴史理論の弊害に対する正しい批判であった。
 - b. 歴史文学はフィクションであり、歴史学と歴史文学の違いははっきりしている。
 - c. 歴史学は主観から自由であるとは言えないが、それでも小説とは異なるいとなみであり得る。
 - d. 歴史の事実は歴史学者によって創造されるものであり、歴史文学と区別をするべきではない。
26. 歴史学者が過去の出来事を客観的に、ありのままに書くことができないのはなぜか。以下の説明のうち、最も適切なものを一つ選べ。
- a. 歴史学者自身もひとつの時代の価値観の中に生きており、その影響を免れないから。
 - b. 社会の事象を数式を用いて分析することを歴史学が避けてきたため。
 - c. ありのままの事実をただ羅列するだけでは、精神的な楽しみを読者に与えることができないから。
 - d. 歴史学者は自分の所属する国の立場を弁護することが求められているため。
27. 歴史修正主義に関する説明として、本文の内容に当てはまらないものを一つ選べ。
- a. 歴史修正主義は、ナチスによるユダヤ人虐殺を、通常の戦争行為として正当化した。
 - b. 19世紀以降、歴史学と歴史文学の違いが意識されるようになったため、歴史修正主義があらわれた。
 - c. 歴史にはさまざまな解釈の余地があることを認めると、歴史修正主義に反対するのは難しい。
 - d. 歴史修正主義は、従来歴史学が頼っていた方法論の弱点を明らかにした。

28. ナチスによるユダヤ人虐殺は無かったとする修正主義の見解に「ショック」を受けた歴史学者に近い心境の人は、次のうちどれか。一つ選べ。
- a. 事故を体験した精神的苦痛から、取材を受けても話すことができない被害者
 - b. 相手に対する憎悪のあまりに、嘘の証言をしてしまったことに気付いた原告
 - c. 巨大地震によって、その地震の大きさを測る装置さえ破壊されてしまった地震科学者
 - d. 企業秘密にしていた発明を、特許を取得する前にライバル会社に奪われてしまった技術者
29. ユダヤ人の歴史との関わりが深いパレスチナに関する説明として、最も適切なものを一つ選べ。
- a. パレスチナ地方はイエス・キリストの時代から、長くイスラム教徒によって占拠されていた。
 - b. ユダヤ人国家の建設を目指すシオニズム運動は、ナチス・ドイツによるユダヤ人弾圧への反発として始まった。
 - c. イギリスはバルフォア宣言によってパレスチナにユダヤ人国家を建設すると約束したが、その約束を果たさなかった。
 - d. ユダヤ人がイスラエルを建国すると、パレスチナ人は第二次中東戦争を起こして多くの入植地を奪回した。
30. 「主観的な歴史認識の台頭」によって、歴史学に起こった変化の説明として、本文の内容に最も合うものを一つ選べ。
- a. 価値観の多様性を尊重し、より自由な解釈を容認するようになった。
 - b. 歴史学もフィクションであることを自ら認めた。
 - c. 文書史料にとどまらない、多様なジャンルの史料の発掘に励んだ。
 - d. 一時は距離をおいていた演繹的な手法に再び近づいていった。
31. 国民革命の時期の中国に関する説明のうち、間違っているものを一つ選べ。
- a. 中国国民党の指導者である孫文は、国民革命の完成を見ることなく死去した。
 - b. 蔣介石が国民革命軍を率いて北伐を開始すると、日本は二度にわたって山東出兵を行なった。
 - c. 国民革命軍が北京に迫ると、日本は張学良を満洲へ撤退させて權益を守ろうとした。
 - d. 共産党の弾圧にふみ切った蔣介石は、南京に国民政府を樹立した。

32. 筆者は清水安三の文章をどのように評価しているか。適切でないものを一つ選べ。
- この文章は作者である清水安三がねばり強く中国社会とかかわり、その動向を見すえようとしたことに価値がある。
 - この訪問記は大きな事件が発生する直前に、たまたま当事者にインタビューした幸運さが価値を生んでいる。
 - この文章は荒削りな部分をかかえながらも、当時の日本にあっては卓越した中国認識を示していた。
 - この文章は一見平凡な認識を表明したに過ぎないが、それが自らの観察をもとに導き出された結論だという点で意味がある。
33. 本文において筆者が清水安三を紹介した理由として、適切でないものを一つ選べ。
- 根気よく観察した上で結論を導き出すという、歴史学者が学ぶべき姿勢を清水が示しているから。
 - 清水が残した文章が、1920年代の日本と中国の関係の複雑さを示す史料を提供しているから。
 - 清水は、歴史は民衆によって創られると考えており、「歴史の語り」の問題をいち早く指摘した人物と言えるから。
 - 清水の存在を知ることが、歩み寄りが不可能と思われるような対立的な国際関係に対して、問題解決の糸口となる可能性があるから。
34. この文章の筆者はジョン・ダワー『敗北を抱きしめて』について、どのような評価をしているか。当てはまらないものを一つ選べ。
- ダワーは、多様な史料の分析を通して、日本人に共通する一つの特徴を描き出すことに成功している。
 - ダワーは歴史学者だが、社会科学全体にとって有意義な手本を示している。
 - ダワーの著作は「平和と民主主義」を追求した敗戦後の日本を分析することで、その理想が今も普遍的な価値をもっていると主張している。
 - ダワーの著作は約60年前の日本という異文化を理解する一つの試みである。
35. この文章は清水安三やダワーの事例から、社会科学のあり方をどのように考えているか。最も適切なものを一つ選べ。
- 社会科学は現実とねばり強く関わり、観察を深めることによって深められる。
 - 社会科学において演繹的な理論や仮説はもはや有効性をもたない。
 - 社会科学とはつねに帰納的な分析方法によって研究されるべきである。
 - 社会科学はタイムリーな現地調査を行うことによってのみ新しい発見を生み出す。

36. 以下の文章は、1920年代に文学者の郭沫若^{かくまつじやく}と谷崎潤一郎との間で交わされた対談の一節を紹介したものである。その内容を踏まえたうえで、関連する説明文のなかで適切でないものを一つ選べ。

現在の中国は独立国ではないんです。われわれの国では、外国人が勝手にやって来て、我々の利益も習慣も無視して、この国の地面に都会を作り、工場を建てるんです。そうして我々はそれを見ながら、どうすることも出来ないで、踏みにじられていくんです。この我々の絶望的な、自滅するのをジーンと待っているような心持ちは、決して単なる政治問題や経済問題ではありません。これが我々青年の心をどれほど暗くしていることか。対外的な事件が起こると、学生たちまでが大騒ぎするのはそのためなんです。我々文学者は、この我々の悶々たる思いを詩にうたい、小説にあらわし、芸術の力で世界中の人間に訴えようと思うのです。これが中国の悩みを心ある人々に理解してもらえる、一番有効な手段であると思うのです。

(吉田曠二『魯迅の友・内山完造の肖像』、新教出版社、1994年より再引)

- a. この文章は、現地の習慣を無視して植民地経営を行ったことが、人々の反発を買った唯一の理由であることをよく示している。
- b. この文章は、植民地体制下の人々が主体性をもって行動出来ず、苦悩している様子を描いている。
- c. この文章は、植民地体制下でしばしば発生した排外的なナショナリズムにも、やむを得ない理由があることを訴えている。
- d. この文章は、政治的権利をもたない植民地体制下の知識人が、文学によって政治的主張を展開しようとしたことを示している。
37. ある国の歴史をその国の出身ではない者が研究することについて、筆者の考えに最も近いと考えられるのはどれか。一つ選べ。
- a. ある国の歴史は、可能なかぎり、その国出身の歴史学者が研究するのが好ましい。
- b. 自分の立場を相対化することができれば、国籍に関係なく対話が可能である。
- c. ある国の歴史を自国と外国出身の二人の歴史学者が研究した場合、二人が同じ結論に達することはほとんどない。
- d. ある国の歴史は、その国の出身者よりも外国人が研究した方が客観性が高くなる。

38. 本文にある吉野作造と李大釗の関係に見られるように、世界史では国や民族の違いを超えた交流や連帯がしばしば記録されている。こうした事例に関する次の説明として、適切なものを一つ選べ。
- a. ヴェトナム戦争が始まると、アメリカを除く世界各国の市民の間で反戦運動が盛り上がった。
 - b. 世界の共産主義運動を進める組織として第二インターナショナルが成立すると、ホーチミンと毛沢東は共にモスクワに留学した。
 - c. スペインでフランコによる内乱が発生すると、ヘミングウェイなどファシズムに反対する多くの知識人が国際義勇軍に加わった。
 - d. 東西冷戦が深まると、インドネシアのスハルトはインドのネルー、中国の周恩来らとバンドン会議を開き、反植民地主義、人種差別の撤廃、各国の相互協力を訴えた。
39. 歴史学について、筆者の考えに沿わないものはどれか。一つ選べ。
- a. 歴史学が社会現象を扱う方法は必ずしも一定ではなく、時代とともに変わってきた。
 - b. 歴史学は、はじめに主張しようとする命題をはっきり設定し、これと史料を組み合わせる作業が大切である。
 - c. しばしば人文科学にも分類される歴史学だが、社会科学にも大きく関わっている。
 - d. 歴史学は、矛盾する情報を扱うが、かといって普遍性が放棄されるわけでもない。
40. 本文の内容をふまえた場合、社会科学が未来に対してなしうる貢献はどこにあると考えられるか。最も適切なものを一つ選べ。
- a. 演繹的な理論によって未来を予測すること。
 - b. 民族・宗教間の対立に悩む現代の人々に生きる勇気を与えること。
 - c. 歴史の必然性を洞察し、みずからその一翼を担うこと。
 - d. 時代の制約から人々が自由となり、他者を理解するまなざしを鍛えること。